

研究室に所属する際に学生が考慮する要因とその特徴に関する研究
—東京農業大学造園科学科を事例として—

○佐藤祐代 [東京農業大学] △栗田和弥 [東京農業大学]

キーワード：研究室、造園、所属、自由意志、目的意識、動機

東京農業大学地域環境科学部造園科学科は、非常に多くの専門領域に分化しており、現在（1998年以來）「環境計画・設計分野」「ランドスケープ資源・植物分野」「景観建設・技術分野」の3分野、さらにそれぞれの分野に属する12研究室が設けられている。学科の学生は授業（単位取得）とは別に、研究室に所属することが一般的である。主として3年生より所属することで、更に専門特化した内容を学習・追究することができる（1年生から入室は可能である）。在室中は、研究室毎による活動やゼミ等が実施され、卒業論文を書く上でも、学生生活を送る上でも大変貴重な期間だとも考えられる。研究室の所属ならびに選択は学生本人の自由意志に基づいていることから、入室時に迷うことも考えられる。しかし、実際に研究室を選択した学生が、どのような理由で選択しているかは明らかにされていない。そこで、学生に対してアンケートにより研究室を選ぶ際の理由を調査し、研究室を選択した理由を分析し、その特徴を明らかにした。

横浜市西部における緑の変遷の特質について

○石井宏征 [東京農業大学] △栗田和弥 [東京農業大学]

キーワード：緑地、農地、自然環境、変遷、横浜市中部

神奈川県東部に位置する横浜市は政令指定都市にも指定される大都市である。「横浜市水と緑の基本計画」（2000）では1970年における水緑率（都市面積辺りの緑地と水辺の合計面積）を現状（2000年）との主な比較対象として、35%ある水緑率を更に向上させることを目標としている。横浜市全体として行政の取り組みでは、公園等の用地取得や整備一方で緑地（率）の増加を実施してきたと考えられる。しかし一方で、休耕地化や後継者不在などによる農地の減少も進んでいることが知られている。しかし、ニュータウン計画などの大規模な開発とそれ以外ではどのように異なっているか、その変遷過程は明らかになっていない。そこで本研究では、1970年当時などと現在（2012年）の都市の緑の推移を、横浜市を4つの地域に大別して比較を行った。具体的には、臨海部を中心とした地域（神奈川区ほか）を東部、現在農地が比較的多い地域（瀬谷区）を西部、三浦半島に繋がる地域（金沢区ほか）を南部、港北ニュータウンを中心とした地域（都筑区ほか）を北部、と定義しそれぞれの緑地の変遷を比較した。